

桜の木の下で

平成二十一年 鈴木 敦子

出会いとは不思議なものである。

知らない土地に住んだとき、友達を作るのは容易でない。私の大垣在住は、夫の仕事の関係で、五十歳を過ぎてからの三年間であった。そこで私は思いがけない出会いと知己を得た。これはそのときの体験記である。「桜の木の下で」は大垣で出会った友人の一人、登史子さんとの交流を書いたものである。このエッセーを登史子さんに捧ぐ。

水の都と言われる大垣市には、市内を流れる何本かの川が在る。そのひとつが水門川である。昔は水路として利用されていて、芭蕉の「奥の細道」結びの地として有名で、「蛤のふたみに別行秋ぞ」の句碑が立っている。

大垣城が眼下に見える、丸の内地区のマンションに住むようになったのは、一九九六年二月末日のことだった。ここは伊吹おろしの風が頬を刺すように厳しい。珍しく陽が出て春が近いのを感じさせた三月上旬、引越し荷物の整理も一段落したので、水門川あたりを散策してみようと思いつ

た。とりあえず見当をつけて南に向かい、一本の川沿いの道を選んで歩を進めたがどうも風情が無い。おかしいなと引き返すと、橋の袂の大きな桜の木の下に犬を連れた品の良さそうな老婦人が立っていた。背の高い色白美人であった。近づいて「水門川はこの川ですか」と尋ねると、「いいえ、向こうのほうですよ。私も行きますからご一緒しましょう」と答えてくれた。

水門川の両岸は樹木が植えてあり、気持良い遊歩道になっていた。遊歩道の内側は桜の木で枝が伸びやかに水面まで垂れている。陽を受けている枝の蕾は待ちかねたように少し赤らみ出しており、開花もそれほど遠くないのでは、と期待させた。

老婦人と出会った場所は俵橋で彼女の住む俵町のすぐ近くだという。鯉が集まる美登利橋、芭蕉の句碑や芭蕉と弟子の曾良の銅像がある場所など、道々親切に教えて頂いているうちに私の住むマンションへの分かれ道まで来た。そこ
の八階に住んでいることを伝えて別れようとしたが、彼女は自分の家の在る場所を教えたいので是非一緒にきてくれと

言う。初めてあった人なのに、と内心途惑いながらも彼女の家まで行ってみた。それが登史子さんとの最初の出会いであった。

登史子さんの家は大垣駅の駅前に通ずる大通りに面し、裏には倉もある商家造りの趣き漂う旧家であった。昔は大きな商店だったらしく、大通りに面した建物の左側は大きなガラス戸4枚の入口になっており、その奥は板張りの部屋でシヨーケースや丸テーブルなどが置いてあった。建物の正面中央には別の入口があり、そこが普段使われていた。入口を入ると半間の土間があり、そこで来客は靴を脱ぎドアを開けて内に入る。そこが応接間であった。室内の両側に特注品と思われる飾り棚が置かれ、中にはご主人の愛蔵書や骨董品などが飾ってある。壁には大きな山水画が掛けてあった。その絵はご主人の父上が書かれたもので、他にも作品が多く残されており、大切にしているように飾っては楽しんでるようだった。飾り棚の上には季節の花が水盤に置いてあった。部屋の中央には立派な応接セットがデンと

置いてある。登史子さんは「どうぞ、お上がりになって」と昼時にもかかわらず誘ってくれた。「時分どきですから改めて」と辞そうとしたが、「このままお別れしたくないわ、おうどんでも一緒に食べながらお話ししましょう。帰られても、お一人でしょう。」と再度勧めてくれるので、「それじゃ、お言葉に甘えて」と少しお邪魔することにした。

冷凍庫に入っていたからと、炊き込み御飯とお吸い物の昼食をいただいた後、傍らに置いてあったお茶道具から抹茶茶碗を出して、サラサラと薄茶をたてて、「一服どうぞ」と勧めてくれた。若い頃は茶道が好きでお稽古に通ったものだが、結婚し、子育てに追われて、そんな気持のゆとりを失って久しかった。久しぶりの抹茶の味は喉の中を甘く、ほろ苦く通っていき、なんともいえぬ美味しさだった。お抹茶が特別美味しかったのは、抹茶が上等であっただけでなく、ポンプで汲み上げた地下水を使っていたからだった。

——このあたりは百間堀りといって以前は何処の家でも

地下水をくみ上げて使っていたそうだ。今でも町の所々に自噴水を見かけるほど水に恵まれた土地だが、マンションの水道水は何故かあまり美味しくなかった。

こうして暖かいもてなしを受けておしゃべりをしているうちに夕方になり、慌てて彼女の家を辞した。この家の主、登史子さんが、私の大垣で初めて出来た友人であった。

旧家に暮らす登史子さんは広い家の管理も大変だと思いが、母に近い年齢にもかかわらず、夏がくれば唐紙を葦戸に替え、掛け軸や飾り物を替え、冬がくれば絨毯を引き込む作業を一人でこなしている。もちろん季節の花のいけばなは欠かさない。夏には籠に気持よく草花がいけてある。私もしけばなを趣味としていたので何流かと尋ねないわけにはいかない。「則天門と言うんですよ」と即答された。

則天門は地元の奥村某先生が開祖だそうで、足元は引き締め、全体にはのびのびとして、客間や床の間によく似合っている。訪ねる度に何をいけてあるかと楽しみであった。

草花を育てるのも登史子さんの趣味である。 小手鞠、水仙、紫蘭、鉄線、杜若、紫陽花、桔梗、椿、鷺草、半夏生、下野草、鹿の子草、菊、クリスマスローズなど挙げきれない。そして「絵をお描きになったら」と、大切な花を時々、二輪、切ってくださいましたものだった。

登史子さんの家には本当に良く伺った。 ちよつと行かないと電話が有り 「どうしてらっしゃるの？ お抹茶飲みいらつしやらない」と誘ってくださいる。 たいていは午後から出かけて、お抹茶をいただきながらおしゃべりをしてくるのであった。

桜の季節には登史子さんと、彼女の愛犬と一緒によく散歩したものだ。 特に俵橋の袂にあったあの大きな桜の木を見上げながら、この桜が私たちを出会わせてくれたのだと感慨深く眺めたものだった。 その花びら一枚、一枚が、周囲の桜の中で一番美しく思えたのだった。 花はどれも美しい。 なかでも思い入れがあればこそ、それは一層冴えて見えるものなのかもしれない。

大垣市は桜が満開の四月、芭蕉祭を行う。商工会は昔、使っていたような舟を水門川に出し、市民や観光客に渡し舟を体験させてくれる。私たち夫婦は偶然乗舟する機会を得た。舟から眺めた景色は真っ青な空を中心にピンク色の桜がシンメトリーに迫ってきて壮大なパノラマの世界に身を置くようだった。その後、登史子さんにそのことをお話したら、「長く此処に住んでいるのに私はまだ乗ったことがないわ」と残念そうにいわれた。地元住民とはそんなものかもしれない。

登史子さんには友達が多い。ほとんどが地元の名士夫人である。そんな方々とも自然に知り合った。彼女たちはグループを作り、書を習ったり、絵を描いたりしている。其の絵がまた変わった絵で初めて見たとき、随分不思議な描き方だなと思ったものだ。芙峰流といって線を描くとき時間をかけてゆっくり筆を引いて墨や絵の具を滲ませるもので、いわゆる「滲み絵」である。東京に住む渥美芙峰さんが始

められたのを、何かの縁で知った大垣城、城主の末裔、戸田正直さんが面白いからと大垣に持ち帰り教えたそうで、今は戸田先生も亡くなり、仲間が月に一度か二度集まって描いているとのこと、たしかに面白い絵であった。

また有るとき、「資料館で別府細工展があるからご一緒に如何ですか」と誘われた。資料館は此処のマンションの直ぐ近くの大垣城に隣接して建っている。（別府細工って何かな）と思いながら、資料館の前で待ち合わせをした。

——別府細工とは大垣市の隣町に位置する穂積町の、別府という地区に住んでいた人々が作った細工物のことである。材料は鉄で出来ており、細工した鉄に蠟を流し込み固め、形造りし、最後に蠟を溶かすと細工物が完成するのだそうで、其の特殊な技法は今では絶えて現存する作品があるのみだという。大垣市では散在している作品を何とか保存したいと文化財保存委員会をつくり、市が責任を持って管理するからと市民に呼びかけたそうで、登史子さんのご主人も供出したそうだ。そのため年に一度の展示会には特別の招待状

が送られてくるらしい。

別府細工は花入れなどもあったが圧倒的に多かったのは燭台であった。其の細工はキメ細やかで繊細、（これは凄（い）と唸ってしまう程、造形美の優れた一品ばかり。昔、電燈の無かった頃に、この燭台に蝋燭の火を点し、ゆらゆらとゆらめくあかりの中で時を過ごしたのかと思うと、まさしく浪漫の世界で現代人の私は感激したのだった。こんな素晴らしい別府細工が時代の変化で需要もなくなり、後継者もいなくなつて絶えたのかと思うと惜しい。手仕事を生業とする職人さんたちはどうか後継者を育てて欲しいと切に願いながら資料館を後にした。

登史子さんはご主人亡き後、犬のリーちゃんと二人暮らしで夜はほとんど出かけないという。そこで揖斐川で行われた大垣市の花火大会に誘った。同行したのは彼女の姪の憲子さん。夫が運転する車で揖斐川の近くに住む知人宅まで行き、そのガレージに車を預け堤防を登っていった。既到大勢の人が集まっていたが運良く陣地取りが出来、四人で

お弁当の海苔巻やおすしを食べながら花火を楽しんだ。頭の上をドスン、ドスンと大きな音を立てながら花火が上がっては開き、散っていく。私たちは「ワー、」とか「キヤー キレイー」などの歓声を上げ童心に返っていた。直ぐ近くの川原で打ち上げているので頭の真上で大輪の花が次々と咲くように見える。時々火の粉が頭の上に落ちてきた。(大空をキャンパスにして花火かな)の俳句が出来た。このときの事を時々思い出しては、面白かったわねと話したものだ。

登史子さんの姪の憲子さんは、旅行のアレンジが上手い。友達を十人ぐらい誘っては、マイクロバスを借り切ってよく旅行に行く。あるとき、京都に桜見物に行くので一緒にどうかと誘われて登史子さんとご一緒した。私は久しぶりに京都に行けるのが嬉しかった。憲子さんは毎年桜見物に出かけるようで、何処の桜が綺麗であるかを良く知っていた。京都は桜も見頃。いく先々の神社、仏閣で八重桜や枝垂れ桜が艶を競っている。私と登史子さんは車中でも出会いの

桜のことを話していた。皆、桜を満喫し満足して帰路に着いた。大垣から京都が近いのを知り、その後たびたび、夫と京都を訪れたものだった。

また、秋には「落ち鮎が美味しいから行きましょう」と誘われ揖斐川の上流へ行った。落ち鮎とは産卵のために川を下ってくる鮎の事で一番美味しいときだと言われている。

鮎料理は、お刺身、塩焼き、魚田、酢の物、から揚げ、天ぷら、鮎寿司、最後に鮎雑炊がフルコース。鮎のお刺身を初めて食べたがあっさりと淡泊、新鮮だから歯ごたえもあり美味しかった。横浜へ帰ってからは、この味に出会えず秋になると恋しくなる。

川の清流を眺めながら、鮎料理をいただけるのは、まだまだ自然が残っている土地の人ならではの贅沢な時間である。川を大切にしてきた人々への神様からの贈り物のようだ。川を汚さないように日々の暮らしを大切にしなければ、と実感できる。時には都会の人も、子供を連れて訪れて欲しい。そしてこんな綺麗な川でなければ鮎はいないんだよと教え

て欲しい。それが生きた学習というものだ。このような教育論まで出てきて鮎一匹でいろいろなことを考えさせられたのだった。

岐阜県は富有柿が有名である。十一月、登史子さんに「柿を頼みに行くので一緒にいかが」と誘われて柿の産地である本巢郡へ行った。糸貫町、北方町、真正町、巢南町、根尾村、穂積町、本巢町と、どこでも赤く熟れた柿が実っていた。行った先は確か糸貫町の果樹園だった。もぎたての色鮮やかな柿が大きな台の上に綺麗に並べられていた。小、中、大、特大、とサイズ別に箱に入れて宅急便で送れるそうので、私も真似て親戚や知人に送ることにした。関東では有名な果物店かデパートに行かないとお目にかかれないような、色艶もよく美味しそうな富有柿であった。（こんなのが届いたら嬉しいだろうな）と思わず自分が送られたような気分になって嬉しかった。

登史子さんの家に集まる友人達は素敵な女性ばかりであ

った。類は友を呼ぶというから自然に彼女の周りには、魅力的な人達が集まってくるのだろう。登史子さんは普通の女性だが、内には知識と教養を積み上げ常に自分をブラッシュアップしてきた魅力に満ちている。豊かな人生を生きるとはこの人のような生き方なんじゃないかなと思えた。

大垣を離れ横浜に戻ってから二年近くなるが、ふと思い出すと、初めて桜の木の下で出会ったときの顔が生き生きと輝いて見えてくる。今日もきつと「いらっしやい」と友人を迎え、犬のリーちゃんも交えて楽しい語らいや笑い声がしているんだろうと自然に笑みが浮かび懐かしく思う。思い返すと登史子さんには教えられることばかりであった。

人と人との出会いは縁である。どんなに長生きしたところで自分が出会える人は限られている。ましてや友達になれる人との出会いは少ない。しかし、その縁が、後々、その人の人生に大なる影響を与えることも多い。

私と登史子さんの出会いもそうである。仮にどちらかが

時間を十分ずらしていたら、そして、あの大きな桜の木が無かったら、私達は出会うことも、知り合うことも無かったと思う。そう考えると、この出会いは必然的に私に与えられたチャンスであった。何故なら、この出会いによって、彼女を通して、大垣の伝統文化に触れられ、私の伝統文化への興味が開眼したからである。

登史子さんは今も私の大切な友人である。

完